

令和5年度 独立行政法人日本スポーツ振興センター新博物館展示・運営に関する有識者懇談会
(第3回) 議事要旨

1. 日時 令和6年1月22日(月) 10:30~12:00

2. 場所 秩父宮記念スポーツ博物館(船橋倉庫)

3. 出席者

・委員

池口徳也委員、大林太朗委員、沓沢博行委員、栗原祐司委員、建石徹委員、田良島哲委員
(計6名)

・事務局

須藤館長、新名学芸員、木村学芸員

4. 視察

事務局より参考資料1(終了後回収)、参考資料2をもとに、収蔵庫の概要、博物館資料、図書館資料、デジタルアーカイブ作業について施設を案内するとともに資料の説明を行った。委員からの主な意見は以下のとおり。

【展示】

- 素材の特性上、保存は50年程が限度の資料が多い状況で展示品を、どのように見せていくかという点で、展示品と映像等の情報をセットで考えることの重要性を感じた。
- 用具や技術史については、資料を見せていくことが学術面でも貴重。単に展示するのみでなく変遷のなかにストーリーを埋め込んでいくにあたり、研究者に限らず、アスリートの委員や、JOCとのつながりからアスリートのことばをもって意味づけすることも可能。JOCミュージアムとの特徴を分けるという意味においては日本の身体文化、スポーツの発展史に着目すべき。時代を垣間見ることができる展示がよい。
- スポーツ用具の使用痕をいかに残すかについて、民俗学の場合は、実測図と呼ばれる詳細な図のなかに使用痕の記録を載せる方法があるが、何らかの記録を残し、共有ができるようにするとよいのではないか。
- オーラルヒストリーの聴取を系統的にやっていただきたい。無形文化財というスポーツの位置づけのなかでも、記録が「もの」を活かすことになり、戦後のスポーツ関係者の語りを集めることは今からやっておくとよい。

【収集】

- 全国の博物館を見て廻ると、小規模の民俗資料館にも地元出身の方が東京オリンピックで使用したユニフォームの展示などがあり、それにまつわるストーリーを集めることも必要ではないかと思う。足で稼ぐ活動も是非、進めていただきたい。
- 古いものの収集は散逸しがちなため、購入費を確保し、コレクターや古書店に寄せられる情

報をキャッチして、必要なタイミングで確保ができるよう、アンテナを張り巡らす必要がある。

○収集したい資料の情報をオープンにすることで主要な古書店のカタログに掲載されることがある。

○資料は個人がお持ちの場合もあり、アンテナを張っておくことで手に入れやすくなる。

【デジタルアーカイブ】

○収蔵スペースに課題がある状況下では、3次元でのデジタルアーカイブの活用も考えられる。データベースでは、インデックス検索を可能にしていたが、選手等の検索について今後、AIなどの最新技術を使用し、より検索性が高められるとよいのではないか。

○展示スペースが限られていることを考えるとデジタルアーカイブ事業が重要。

○今後を見据え、科研費や文化庁の博物館としての予算獲得も必要ではないか。

会議閉会に際して、事務局から第4回有識者懇談会は2月19日（月）実施予定と事務連絡があった。

（以上）